

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は3ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出**しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

次の **文章A** ・ **文章B** を読んで、あとの **問題** に答えなさい。

(*印の付いている言葉には、文章の後に〈言葉の説明〉があります。)

文章A

小学校もそうですが、中学校や高校の教育は、文部科学省が定めた学習指導要領に基づいて行われます。教科書は、出版する教科書会社が違っても、どれも学習指導要領に沿って作られ、文部科学省が検定をして文部科学省検定済みの教科書として学校に届けられます。生徒たちが学ぶのはこの教科書です。

しかし、大学に入るともう文部科学省検定済みの教科書は影も形もありません。大学教育には、学習指導要領は存在しないからです。教育はそれぞれの大学の独自性に任せられます。

講義で先生が指定した教科書を使うことはありませんが、その教科書は文部科学省の検定とは無関係です。担当の先生が、これを使って講義を行おうと考えて、その先生の責任において選んでいます。大学生はそれを使って勉強します。

これに対し高校までは、誰が見てもこれは間違いないという内容を教わるのです。どの科目も、教科書は学問の世界でこれだけは間違いないとされていることを精選して載せています。試験対策では、教科書に書いてあることをそのとおり信じて勉強すればよく、いちいち「ここに書いてあることは本当だろうか」と疑う人はいませんね。教科書を使って一生懸命勉強し、暗記してもいいし、その教科書についての先生の説明をそのまましっかり聞いて、ノートをとって理解すればいい。これで何の問題もありません。こうした理由から高校までは「生徒」と呼ぶわけ

です。

大学教育はこれとはまったく違います。大学における「学生」とは、自ら学んでいく生き方をする人間のことです。

学生は、文部科学省検定済みの教科書ではなく、検定されていない教科書を使います。検定されていないとは何を意味するかわかりますか。講義で使われるさまざまなテキストには、どれも著者がいます。特定の著者の考え方に基ついてテキストは書かれています。その内容が、関係する学界の主流の考えに沿っているかどうか、実はわかりません。学界の主流ではなく、反主流の先生の本という可能性もあります。学界の中で少数派の先生の主張が書かれた本かもしれないということです。

ところが、いずれ何十年かたったとき、それが全体の主流になることがあります。「あつ、あの先生の言ってることでよかったんだ」ということになるかもしれない。逆に、当時は主流だったけれども、次第に学者たちから支持されなくなると、後になってから「間違いだつた」「いまでは通用しない」といったことになることも起こりえます。

大学とはそういうところですよ。授業で習うことがすべて正しいと思っ込んで大間違いです。一生懸命勉強したのに実は間違いでしたということが、後から起きるかもしれない。あのとき勉強したことは一体なんだったのかということになりますね。

大学で学ぶときは、このスリルとサスペンスがたまらなく楽しいのです。

(池上彰『なんのために学ぶのか』)

文章B

公民という言葉を聞くと、私たちはすぐに中学の「公民分野」を思い浮かべるかもしれませんが、この言葉はいわゆる「公民分野」に限った言葉ではなくて、小中学校の「社会科」に共通するキーワードとして位置づけられています。そして「公民的資質」という語が社会科全体のキーワードとして位置づけられています。

この公民的資質の一つとして国民意識が位置づけられます。つまり、国として「安定的に維持・発展させていくには、国民にどういう国民意識を持ってもらいたいのか」ということが教育に反映されるなかで、公民的資質を作り上げる場として学校という空間が位置づけられるということなのです。

こうした産業的身体の育成と国民意識の形成といった二つの役割は、基本的に今日でも続いています。産業的身体の話に戻りますと、今でもこの考え方は失われたわけではありません。たとえば「これからはパソコン教育と英語教育にますます力を入れなければならない」という議論がさかんに行われていますが、これは現代社会にみあった産業的身体の育成に向けた新たな要請なのです。パソコンも英語も、IT革命とグローバル化をにらんだ身体スキルの要請なわけです。

学校は社会に有用な人材を育成するという目的と常に裏腹の関係にあります。

結局、学校というところは、その時々「社会に適応できる人」「社会に有用な人」を育成することが第一の目的である、と言ってもいいと思います。

しかし皆さんは、あるいはマスコミも、ほとんどの先生ですらも、や

やもすると「理想的価値」を身につけさせるとか、「道徳心」を高めるとか、「すばらしい人間を育てる場」というイメージを、学校に対して期待しがちだと思われまます。とくにまじめな先生ほど、その思い込みが強いという傾向があるように思います。しかし、あまり理想を高く設定しすぎると、現実からのしっぺ返しも強くなります。

ここまで述べてきた中で、とりわけ私がとくに言いたかったのは次のようなことです。

まず学校というのは、そもそもその成り立ちとして、産業的身体を作ったり、その都度の社会に適合的な人間の意識を作るということが、ベースになっていく場でした。もともと、過剰に高邁な理想をもって、人間の資質や個性を伸ばそうとして生まれた場所ではないということです。そして「学校」が持つこのコンセプトは、形を変えつつ、現在までも変わっていないと考えられるのです。だからそこを出発点に、学校という器を考えたいほうがよいと私は思うのです。

ですからあんまり肩肘を張らずに、初めから学校という場をあまり理想化して思い描かないほうがいい、というのが、私が主張したい第一のポイントです。

「しよせん学校」という制度なのです。もちろんすぐその後には「されど学校」という言葉が続くわけなのですが。

つまり、あまり学校を理想化せずに、バランスの良い学校イメージを保つということが、私の考えのポイントなのです。

(菅野仁『教育幻想』による)

〈言葉の説明〉

高邁……けだかく、衆にすぐれていること。

問題

〔問題1〕

文章Aに「一生懸命勉強したのに実は間違いでしたということが、後から起きるかもしれない。」とありますが、筆者はこのような事態を肯定的にとらえているようです。これは、筆者が大学とはどのような教育が行われる場であると考えているからですか。**文章A**全体をふまえて、五十文字以上、八十文字以内で説明しましょう。

〔問題2〕

文章Bに「あまり学校を理想化せずに」とありますが、「理想化」してしまうと学校が果たす役割をどのようなものだと期待してしまうと筆者は考えていますか。**文章B**全体をふまえて、五十文字以上、八十文字以内で説明しましょう。

〔問題3〕

二つの文章を読んで「これからの学び」をあなたはどのようなものにしていくべきだと考えますか。いくつかの段落に分けて、分かりやすく書きましょう。なお、全体の字数は四百字以上、五百字以内とします。

〈書き方のきまり〉

- 〔問題1〕〔問題2〕については、行を変えてはいけません。
- 題名、名前は書かずに一行目から書き、行をかえてはいけません。書き出しや、段落をかえるときは、一まず空けて書きましょう。
- 行をかえるのは段落をかえるときだけです。会話などを入れる場合は、行をかえてはいけません。
- 読点↓、句点↓。かぎ↓「などはそれぞれ一まずに書きましょう。ただし、句点とかぎ↓」は同じますに書きましょう。
- 書き出しや、段落をかえて空いたますも字数として数えます。
- 最後の段落の残りのますは、字数として数えません。
- 文章を直すときは、消しゴムでいいねいに消してから書き直しましょう。